

令和元年6月16日現在

機関番号：24506

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K20723

研究課題名(和文)急性期病院における看護師と看護補助者の効果的な協働のあり方の検討

研究課題名(英文) Examination of the way of effective collaboration of nurse and nursing assistant in acute hospital

研究代表者

奥村 和代 (Okumura, Kazuyo)

兵庫県立大学・看護学部・助教

研究者番号：20755805

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、急性期病院における看護師と看護補助者の協働のあり方を、看護師が捉えている「業務」の視点から検討した。2つのインタビュー調査を通して、看護師しかできない行為を看護の要素が含まれるやりようで実践する事が看護師の専心すべき業務であると看護師は認識している、患者への影響を考慮し、看護師が専心すべき業務より看護補助者の補完業務を優先したり、その他のことを優先している状況があること、が明らかになった。

以上より、効果的な協働の為に、効率的な入力ができる電子カルテシステムの構築、現状の人数で完結できる協働体制の再考、看護補助者の役割遂行能力の向上が必要であると考えます。

研究成果の学術的意義や社会的意義

時代とともに医療は変化し、それに伴い看護も変化していく中で、看護として変化してはいけないものの示唆を得ることができたことは、看護学の発展に寄与しうると考える。

また、看護師と看護補助者の効果的な協働を妨げている要因を明らかにできたことは、今後、急性期病院に入院中の患者に質の高い最適な看護の提供につながるものであると考えます。

研究成果の概要(英文)：In this study, we examined the way of effective collaboration of nurse and nursing assistant in the acute hospital from the viewpoint of "business" that nurses recognized. Two interviews suggested the following: The nurses are recognized that it is the work of the nurses to devote to practices that is permitted only to the nurses in a way including components of nursing, there is a situation that priority is given to complementing work of nursing assistant over work that nurse should be devoted considering the impact on the patient, it is being taken over by other duties.

I suggeste for effective collaboration between nurses and nursing assistants: construction of an electronic health record system capable of efficient input, rethinking the cooperation system that can be completed with the current number of people, improving the role performance ability of nursing assistants.

研究分野：看護管理学

キーワード：業務 専門職 専門性 協働

### 1. 研究開始当初の背景

医療現場では、患者に質の高い医療を提供することを目的とし、チーム医療が推進され、看護職をはじめとした医療関係職が、専門性を必要とする業務に専念するための業務分担がすすめられている。看護師の業務は、項目だけを見ると他職種とオーバーラップしていることが多いため、看護師は多くの職種との業務分担を進めている現状がある。なかでも特に、診療報酬の改定により、急性期病院において看護師と看護補助者との業務分担が推進されており、看護師と看護補助者の効果的な協働の仕組みの構築が課題となっている。急性期看護補助体制加算が導入された2010年以降に発表されている、看護師と看護補助者の業務分担に関する研究には、看護師が行っている業務を一部担当する看護補助者を導入することで看護師の業務量が減少したことを示した研究(谷田部ら、2012)がある。しかし、自施設における看護補助者制度の改革についての経過を述べるにとどまっており、その効果は示されていない。また、看護補助者と業務分担をする際の業務の選択基準や、業務分担をした結果、看護師がその専門性を十分に発揮できるようになったことを十分に明らかにした研究は見当たらない。

中堅以上の看護師は、自分の実践が本質的には看護であっても、自分の「やりよう」によって看護になりえていないと自分自身が判断すると、その実践を「業務的」と表現する(奥村、2017)。そして、看護師は自分自身の何らかの判断基準によって「看護」と「業務」を別のものとして捉えている可能性が示唆されている(奥村)。保健師助産師看護師法第5条で看護師は、療養上の世話又は診療の補助を行うことを業とする者と定義されている。この定義から考えると、「看護」を実践することは看護師の「業務」であり、仕事である。しかし、看護師は仕事上行っていることが本質的には看護であっても、あえて「看護」と「業務」というように切り離して表現している状況がある可能性が考えられる。これは、看護師が看護として実践していることは、日常的・習慣的ケアであるがゆえに、看護師自身が看護として認識できていなかったり、看護を実践する上で大切にしたいことと、実際にしていることがずれていたりすることで、自分達がしていることの何が看護で何が看護ではないのかが不明瞭になっていることが原因の一つであると推測される。看護師の中で「看護であるもの」と「看護ではないもの」が不明瞭になっていることは、看護補助者と業務分担を進めていく上で問題である。急性期病床の機能分化が進む中で、今後急性期病院は、限られた人的資源の中で看護を実践し、質の高いケアを提供していかなければならないことが予測される。しかし、本質的には看護であっても、看護師が看護になりえていないと認識しているものを「業務」と捉えている可能性がある中で、「業務」という言葉そのものに囚われて看護補助者との業務分担を進めれば、看護師が力を注ぐべきものが明確ではないままであり、ますます看護師自身が看護を認識できない状況となり、表面的な協働となることが危惧される。チームには、業績向上をもたらすシナジー効果があると言われており、高いシナジー効果を発揮するには、協働が重要となってくる。協働をするには、それぞれの役割を正しく認識する必要がある。つまり、看護師と看護補助者がチームとして効果的な協働をし、患者に質の高いケアを提供するためには、看護師が看護の意味や価値を認識した上で、協働の仕組みを検討し、整える必要がある。よって、看護師が捉えている「業務」の構造を明らかにした上で、看護師と看護補助者の効果的な協働のあり方を検討することが必要である。

### 2. 研究の目的

本研究は、急性期病院における看護師と看護補助者の協働のあり方を、看護師が捉えている「業務」の視点から検討することを目的とする。急性期病院に勤務する中堅以上の看護師が「業務」と捉える実践と、「看護」と捉える実践を明らかにし、看護師が「業務」と捉える実践の様相を構造化することで、看護師が専心する必要がある「業務」を明らかにする。そして、看護実践における看護師と看護補助者の業務分担の課題を明らかにし、効果的な協働の仕組みを検討する。これらを明らかにすることで、看護師と看護補助者間の効果的な協働の仕組みを構築する一助とするとともに、チーム医療における多職種間での効果的な業務分担の推進に貢献する。

### 3. 研究の方法

本研究では、「実践」を、看護実践の定義を超えて看護師が行うことすべてを含めることとし、「看護師が仕事上で行動によって実行すること。ただし、実行することそのものだけでなく、実行している時の態度や情意も含む。」と操作的定義をした。

#### (1) 「業務」と認識する実践の様相を明らかにするインタビュー調査

急性期病院に勤務する中堅以上の看護師が「業務」と認識する実践の様相を明らかにすることを目的に、急性期病院に勤務する中堅以上の看護師12名を対象として、半構成的面接を行った。「業務」と認識する実践とその理由、「業務」ではないと認識する実践とその理由、「業務」と「業務ではない」実践の区別は何によってなされるのかに関する語りを、どのような実践を「業務」と捉えているのかという視点で、質的帰納的方法で分析を行った。

#### (2) 忙しいと感じる状況における実践内容を明らかにするインタビュー調査

(1)の調査より、忙しさを理由に、本来看護師が行うべき看護の要素が含まれた実践よりも

優先せざるを得ない状況があることが推測された。全体の研究計画立案の時点では、(1)の調査の後、看護師と看護補助者の業務分担を決定する際の基準の実態調査を行う予定であったが、実際に調査に着手する時点でそれらに関する調査報告がなされていたこと、(1)の調査によって示唆された内容を明らかにすることは、研究課題を検討するうえで重要であると判断し、本調査を実施した。

本調査では、急性期病院に勤務する中堅以上の看護師が忙しいと感じる状況の中で、看護となりえるやり方で看護を提供することよりも優先していることを明らかにすることを目的に、急性期病院に勤務する中堅以上の看護師8名を対象として、半構成的面接を行った。忙しいと感じる状況の中で仕事上行っている内容、忙しいと感じる勤務時に多くの時間を割いていると感じる仕事はどのようなものか等の語りを、忙しいと感じる状況の中で、看護となりえるやり方で看護を提供することよりも何を優先しているのかという視点で内容分析を行った。

上記の両調査は、研究者が所属している研究機関が設置する研究倫理委員会の審査を受け、承認を得て実施した。インタビュー中に語られる内容について匿名性を確保すること、研究への協力の可否によって研究協力対象者が不利益が被ることがないこと等について研究依頼書に記載し、当該書面を用いて口頭にて説明を行った。同意書への署名を以て、研究協力者としてインタビューを行った。

#### 4. 研究成果

##### (1) 「業務」と認識する実践の様相

「業務」と認識する実践内容は、看護師の仕事全体、看護師ではなくてもできること、看護師にしかできないことだが、自分のやりようによって看護になりえていないと認識したこと、看護実践そのもの、看護師としてやるべきこと、の5つに分類された。そして、「業務」という言葉は文脈で使い分けられており、言葉の使い方は人それぞれであった。しかし、仕事の捉え方は共通しており、【非専門的な仕事】と【専門的な仕事】で分類されていた。さらに【専門的な仕事】は、自分のやりようによって<看護の要素が含まれていない>仕事と、<看護の要素が含まれている>仕事で分類されていた。

【専門的な仕事】の<看護の要素が含まれていない仕事>の内容は、自分の実践に専門的な思考や判断が欠如している、思考の中心が患者ではない、自分の行為に責任を負っていない、患者より仕事の効率を重視している、その人を尊重しない関わりをしている、患者の状態を良くも悪くもさせない関わりをしている、と自分自身が認識した実践であった。

【専門的な仕事】の<看護の要素が含まれている仕事>の内容は、介入の背景に看護の思考や判断が存在する、患者を中心にした関わりをしている、その人の生活を重視した関わりをしている、患者がより良い状態になることを目指した関わりをしている、自分の行為に責任を持つ(っている)、対象に関心を寄せ(る)ている、と自分自身が認識した実践であった。

##### (2) 忙しいと感じる状況における実践内容

忙しさの要因としては、各加算のための入力作業、それぞれの職場で作成されているチェックリストを埋める作業、看護補助者のフォロー、医師との調整、経験が浅い看護師への教育、があげられた。

忙しいと感じる状況では自分が大切だと思う看護の実践や、患者の重症度に関係なく各患者に必要な看護を提供することより、自分の仕事の効率、自部署での決まりや暗黙の了解、同僚との協調、看護補助者の仕事の補完、を優先していることが示唆された。

##### (3) 急性期病院における看護師と看護補助者の効果的な協働のあり方

2つのインタビュー調査を通して、看護師にしかできない行為を看護の要素が含まれるやりようで実践することが看護師の専心すべき業務であると看護師は認識している、患者への影響を考慮し、看護師が専心すべき業務より看護補助者の補完業務を優先したり、その他のこと優先している状況がある、ということが明らかになった。

効果的に協働するためには、看護師と看護補助者がそれぞれの役割を果たすことが必要である。しかし、現状では、看護師は認識している看護師としての役割を果たすには不十分な環境で実践をしていることが示唆された。効果的な協働に向けて、効率的な入力ができる電子カルテシステムの構築、現状の人数で業務が完結できる協働体制の再考、看護補助者の役割遂行能力の向上が必要であると考えられる。

##### (4) 今後の展開

今回の研究では、現状を明らかにするまでを行った。今後、臨床現場において、業務整理や協働体制の構築を管理者とともに実践していくこと、看護補助者確保の取り組みや看護補助者の能力向上に関する取り組みの実態調査を行う必要がある。

<引用文献>

- 1) 谷田部美千代, 黒島沙織, 村守隆史, 竹端敏, 森田文枝 (2012). 病棟における看護補助者への業務移管による看護師業務負担軽減への試み. 恵寿総合病院医学雑誌, 1, 8 - 11.
- 2) 奥村和代. (2017). 急性期病院に勤務する看護師が業務的と認識する実践の様相. 兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要, 24, 13 - 25.

5. 主な発表論文等

[学会発表](計 1 件)

Okumura K. (2019). Nursing jobs recognized as a task by nurses who work at acute hospitals in Japan. The 22th East Asian Forum of Nursing Scholars.

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。